ポケットモンスター
イン・ムーン

せさみ～

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

おじさんの大切な植木鉢を壊してしまった主人公ユウキ。植木鉢代を稼ぐためにユウキは働く事を決意する。

これはかわいいポケモン達とクッソ汚いトレーナー達によるハートフルな物語（大嘘）である。

目　次

はい、よーいスタート（棒）――1
グレイシア、いなりとの出会い ―6
いい素材やこれは…――14
仲直り――21

はい、よーいスタート（棒）

　なつかしさと新しさが交差する街、キンセツシティ。そこにある飲食店、キンセツキッチン。僕はよくここに来ている。この店のビレッジサンドが好きだからだ。前まではバトルフードコートなんて呼ばれていて、飲食というよりもバトルをメインとしたところだったのでポケモンを持っていない僕にとっては近付きづらい場所だった。しかし、最近になってバトルをする人としない人とで席を分けられる仕様になり、バトルをしなくても食事を楽しめるようになり格段に行きやすくなった。さらに、値段も見直されビレッジサンドは５００円で食べられるようになった。僕は頻繁に行っているというわけだ。

　今日もビレッジサンドを食べるため、店に来ていた。

　今日は客が少ないようで、かなり静かだ。バトル広場でなぜか小さい子達がバレーボールをしているが、特に気にしないようにして僕は注文をしに行く。

　店員「ご注文は？」

　ユウキ「ビレッジサンドセット１つください」

　店員「かしこまり！」

注文をし終えた僕は空いている席に座り、商品が来るのを待つ。店員さんの返事が少しおかしかったような気がしたがまあ空耳だろう。

……それにしても本当に静かだな。いつもはもう少し人がいて、そこそこ賑やかなのに、今はボールを弾き合う音だけが店内に響いている。

店員「お待たせしました！」

待つこと数分、注文の品がきた。できたてのビレッジサンドが目の前に置かれる。

ユウキ「いただきます」

食べようとした瞬間だった。「あっ！」という声と共にボールがこちらに飛んできた。最初は受け止めようと思ったが、ボールの飛んできた位置が丁度ビレッジサンドの真上だったので「守らなきゃ……！」という使命感が生まれ反射的に弾き返してしまった。

そして返したボールはカウンターのそばにあった植木鉢に激しくぶつかり、地面に落ち、ダイナミックに割れた。

ユウキ「やってしまった！」

すると入り口近くの店員専用のドアからスーツを着たおじさんが出てきた。おじさんは割れた植木鉢を見つけると、頭を掻きながらがっかりした表情になった。

おじさん「やられたなぁこりゃ……」
彼は植木鉢を拾い、改めてその無残な姿を近くで確認し、舌打ちしている。
おじさん「困るんだよなぁ……」
すると僕を睨みながら、こちらへ歩いてきた。
おじさん「お前か？」
ユウキ「いや、その……」
おじさん「荒れてんだよなぁ」
ユウキ「……えっ？」
おじさん「荒れてんだよなぁ植木鉢ィ！」
見ればわかるが、確かに改めて見ると無残な姿になっている。
おじさん「大体なんでお前店の中にボールなんか持ってきてんの？　馬鹿だろ？」
ユウキ「いえ、これは僕のじゃ」
おじさん「他に誰がいんだよ？」
ユウキ「そこにいる子達の……って、あれ？」
さっきまでいたはずの子達がいなくなっていた。どうやら逃げたようだ。
おじさん「お前どうすんだよ？　高かったんだよなぁ！　植木鉢ィ！」
ユウキ「すいません、弁償します」

　こうなりゃお金を払うしかない。ここまでの旅で得たお小遣いを出せばなんとか買えるだろう。
おじさん「お前の返せるような額じゃねぇんだよなぁ！」
ユウキ「えっと、おいくらですか？」
おじさん「１１４５１４円だよ！」
１１４５１４円!?　なんて中途半端な額なんだ。しかも高すぎる！　８１０円とか１９１９円ぐらいかと思ってた。こんなの僕が今すぐポンと出せるような金額じゃない。どうしよう……。
悩んでいると今度は入り口から金髪でサングラスをかけた、上半身はがっちりしているが下半身が細すぎる男の人が入ってきた。
男「あらレンさん、どうしたの？」
男がおじさんに話しかける。どうやらこのスーツのおじさんはレンという名前らしい。
レン「タクヤさん！　聞いてくださいよ。こいつがねぇ……俺の植木鉢を壊したんすよ」
この金髪の人はタクヤさんというのか。タクヤさんは「んー……」としばらく考えこみ、何かを閃いたようにレンさんに提案する。

タクヤ「あっそうだ。レンさんってここのオーナーでしたよね？　植木鉢代を稼ぐまでここで働かせてみるってのはどうですか？　この前人手も足りないって言ってたし、レンさん好みの条件じゃないかな～って」

レン「あっいいっすね。そうしましょうか。じゃあお前早速明日から働けよ」

ユウキ「えっ!?」

急展開過ぎる。少し考えたい……と思ったがレンさんが鬼の様な形相で睨んでくるので何も言い返せず

ユウキ「はい……わかりました」

こう答えるしかなかった。　しかし、事情はどうあれ、壊してしまったのは僕だ。ここは責任を取って働く事を決意をした。そして、タクヤさんには感謝しないといけないかも知れない。もしこのまま話が進まなかったら僕はどうなっていたかわからない。

タクヤ「明日から頑張れよ」

ユウキ「はい、ありがとうございます！　おじさん」

タクヤ「おじ→さん←だとぉ!?　お兄さんダルルォ!?」

こうして僕のキンセツキッチンでのバイト生活が始まった。

グレイシア、いなりとの出会い

壊した植木鉢代を稼ぐためキンセツキッチンで働く事になった僕。働き始めて数日が過ぎた。色々と失敗ばかりしているが、この職場には徐々に慣れてきた。

先輩「おう新人、ちょっと冷蔵庫から材料取ってきてくれないか？」

ユウキ「わかりました！」

先輩「頼むよ～」

ユウキ「冷蔵庫は～っと、あった！　　早く取って戻らなきゃ」

開けた瞬間、そこには材料と一緒にポケモンが入っていた。

ユウキ「グ、グレイシア!?」

入っていたのはイーブイの進化系であるグレイシアだった。

グレイシア『何？』

ユウキ「いや僕の台詞なんだけど……」

グレイシア『たまたまその辺を歩いてたら、丁度良い寝床を見つけたのよ』

ユウキ「それがここ？」
グレイシアがこくりと頷く。まずどうやって店に入ってきたのか、何で誰にも見つからなかったのか……とか色々問題は山積みだがこの際いいとしよう。
ユウキ「実は先輩から頼まれた物を取らなくちゃいけないんだ、悪いけどどいてもらっていいかな？」
グレイシア『私を捕まえないの？』
ユウキ「えっ、どうして？」
グレイシア『私を見かけたトレーナー達はみんな捕まえようとしてきたわ。あなたもそうするんじゃないの？』
ユウキ「確かに野生のグレイシアは珍しいね。でも僕はそんなことしないよ」
グレイシア『ふーん……』
そう言うとグレイシアは冷蔵庫からひょいっと外へ出てきた。
ユウキ「どっちにしても僕は自分のポケモンを持っていないしね。捕まえたくても捕まえれないよ」
グレイシア『まあ仮に襲ってきても返り討ちにするだけよ、他のトレーナーみたいにね』
ユウキ「ははは、それは怖いなぁ」

彼女がどいてくれたおかげで材料も入手できた。この子は話し方からして女の子で間違いないだろう。

ユウキ「ありがとう、グレイシア。それと、ここはよく使うで場所だから、その……」

こういう事を言うのは心苦しいが仕方ない。それに彼女には冷蔵庫以外にもっと良い住処があるはずだ。

グレイシア『そのようね。せっかくいい新居を見つけたと思ったのに……またお引っ越しね』

ユウキ「ごめんね。お詫びと言ってはなんだけど」

グレイシア『これは……アイスクリーム？』

ユウキ「うん。結構うちの人気商品なんだけどおいしいよ！」

グレイシア『ふーん……、とりあえずいただくわ、ありがと』

ユウキ「どういたしまして。じゃあ僕もう戻るから！」

僕はダッシュで先輩のところに戻った。

グレイシア『変な人』

ペロッ

グレイシア『おいしい……』

☆☆☆

ユウキ「取ってきました！」

先輩「おう、ありがとう」

ウィーン

先輩「あっ、お客さんだ。受付頼むわ」

ユウキ「はい！」

ユウキ「いらっしゃいませ」

入ってきたのはサングラスをかけた男の人だ。レンさんと似たようなスーツを着ている。

男「ビレッジサンド一つ」

ユウキ「かしこまりました！　出来上がりましたらお持ちしますので空いてる席でお待ちください」

男の人は頷き、近くの席に座った。

しばらくして出来上がった商品を持って彼の所へ行った。

ユウキ「おまたせしました！」

男「ありがと～、うわぁ、あいしそう！」

ユウキ「ごゆっくりどうぞ」

男「君、見かけへん子やなぁ。新入り？」

ユウキ「あっ、はいそうです。数日前からここで働かせてもらっているユウキです」

男「そっか、頑張ってねぇ～」

ユウキ「ありがとうございます！」

ねっとりとした話し方がなんとなく気になるけど、悪い人ではなさそうだ。商品を渡したのでカウンターへ戻ろうとしたその時だった。

男「ちょっと待って！」
突然呼び止められた。僕は急いで彼の所へ戻る。
男「いなりが入ってないやん！」
ユウキ「……えっ？」
男「俺はいなりが食べたいから注文したの!!」
この人は何を言っているんだろうか。ビレッジサンドとはサンドイッチ……つまりパン料理だ。いなりなんて入ってるわけがない。そんなことなどお構いなしに男の人は文句を言い続けている。クレーマーでしょうか？

『ビレッジサンドはパン料理よ。いなりなんて入ってるわけないでしょ。馬鹿じゃないの？』
声のした方を見ると、そこにいたのはさっきのグレイシアだった。
男「なんやお前、誰に向かって口聞いとんねん」
グレイシア『あなた以外にいる？　　あまり騒がれると迷惑だから出て行ってくれないかしら』
ユウキ「ちょ、ちょっとグレイシア！　　いくらなんでも……」
グレイシア『あら？　　私はあなたが思っていることを代弁してあげただ

けよ』

ユウキ「えっ？」

グレイシアの言葉を聞いた瞬間、男の怒りの眼差しは僕に向けられた。

男「上等やんけ、こうなったらトレーナーらしくポケモンバトルで決着つけようやないか！」

男はモンスターボールを取り出す。いや僕は全然上等じゃないんですけど……。

ユウキ「でも、僕は自分のポケモン持ってないのでバトルは……」

男「何言うてんねん。そこにグレイシアがおるやんけ！」

ユウキ「えっとそれは」

グレイシア『上等じゃない、やってあげるわ！』

いやだから全然上等じゃないんだって！

僕はグレイシアを抱きかかえ、男の人と距離をとる。そして彼に聞こえない声でグレイシアと話しかけた。

ユウキ「本当にやるの？」

グレイシア『当たり前じゃない。相手ももうその気よ？』

僕は考えた。他に何か丸く収める方法はないかと。色々考えたが何も思い浮

かばなかった。どうやら戦うしか選択肢はなさそうだ。

ユウキ「わかったよ、やるよ」

グレイシア『やっとその気になったのね。じゃあ行くわよ』

ユウキ「その前に、君が今どんな技を覚えているか教えてもらっていい？」

グレイシア『いいわよ』

男「はよしてんかぁ～」

ユウキ「おまたせしました。それではやりましょうか、えっと……」

男「名前か？　　俺の名前はカーリーや」

ユウキ「カーリーさん、勝負です！」

いい素材やこれは…

カーリー「さぁ、解体ショーの始まりや。いけ、ナカノ君！」
カーリーさんが勢いよく投げたモンスターボールから出てきたのはリザードンだ。
ニックネームはナカノ君というらしい。
グレイシア『リザードン……』
ユウキ「相性的にはあまり良い相手とは言えないね」
グレイシア『ふん、相性だけが全てじゃないわ。行くわよ！』
そう言うとグレイシアはれいとうビームを繰り出した。そしてナカノ君に直撃した。

ガチィン!!

カーリー「なかなか良いれいとうビームやな、ナカノ君もちょっと応えたんちゃう？」
ナカノ君『グオォ（冗談はよしてくれ）』
攻撃は確かに命中した。しかしナカノ君はピンピンしている。

グレイシア『あんまり効いてないようね……』
ユウキ「ちょっとグレイシア！　　僕はまだ指示を出してないよ！」
グレイシア『でももうバトルは始まってるんでしょ？』
ユウキ「そうだけど……一緒に戦ってくれるって言ったじゃないか」
グレイシア『戦うとは言ったけど、あなたに従うと言った覚えはないわ』
ユウキ「そんなぁ……」
カーリー「なんやなんや仲間割れか？」
グレイシア『勘違いしないでもらえるかしら？　　私と彼は元から仲間なんかじゃないわ』
カーリー「ほーん……」
グレイシア『そちらは何もしてこないのかしら？　　こないのならどんどん行かせてもらうわ！』
そう言うとグレイシアは猛スピードでナカノ君に向かってこおりのつぶてを出すつもりだ。
ユウキ「ダメだグレイシア！　　闇雲に突っ込んだら！」
グレイシア『あなたは黙って見ていなさい！　　こんな相手、すぐに倒して』
カーリー「ナカノ君、弾き返せ」

ナカノ君『グオオオ！』
グレイシア『!?』
グレイシアの攻撃は届くことはなく、ナカノ君の大きな翼で空中へ打ち上げられた。
グレイシア『あぐっ……！』

カーリー「続けてフレアドライブや」
ユウキ「グレイシア！　　避けて!!」
強めのカウンターをくらった上に、空中へ打ち上げられた状態では避けられない事はわかっていた。それでも叫ばずにはいられなかった。
ナカノ君のフレアドライブが直撃し、グレイシアは遠くまで吹き飛ばされた。僕はすぐに彼女のもとへ走った。
ユウキ「グレイシア！」
僕はグレイシアを抱き上げた。彼女は目を瞑ったままぐったりとしていて、見るからにかなりのダメージを負っている。

カーリー「やっぱりナカノ君のフレアドライブを……最高やな！」
そう満足気に言いながら彼はナカノ君をモンスターボールへ戻した。そしてこちらへ歩いてきた。

カーリー「どうや？　　俺強いやろ？　　強いって言ってみ？」
完敗だ。僕とグレイシアの息が合ってなかったというのもあるが、それを抜きにしても彼のポケモンの技は本物だ。
ユウキ「はい、強いです」
カーリー「そうやろ。ならケツの穴見せろや」
それはよくわからないが、とにかく彼は強いということは確かだ。

グレイシア『かっ、勝手に終わらせないで……もらえるかしら……わたしは……まだ……』
ユウキ「グレイシア、喋っちゃダメだよ！」
カーリー「はぁ～……」

カーリー「あ　ほ　く　さ」
カーリー「わからんか？　お前はもう立てんくらいボロボロなんや。無理すんな、今回はお前達の負けや」
グレイシア『ッ!!　まだよ……まだ……』
カーリー「おい、ユウキ。お前なにボサッとしてんねん。早くボールに戻したれや」
ユウキ「実は僕、モンスターボール持ってないんです……」
カーリー「はっ？　うせやろ？」
ユウキ「いえ、本当です。この子と僕はさっき出会ったばかりでその……僕はこの子のパートナーじゃないんです」
カーリー「仲間じゃないっていうのはほんまやったんか。わかった、ならこれ使い」
そう言うとカーリーさんは僕にモンスターボールをひょいっと投げてきた。
カーリー「新しいモンスターボールや。この子をそれに入れてはよポケモンセンターに連れて行き」
ユウキ「でも……」

カーリー「何しとんねん。このままじゃポケモンは死ぬぅ！ポケモンは死ぬんや！」
ユウキ「わかりました」

ユウキ「ごめんね、グレイシア……」

僕は彼女の前になるべく、そっと優しくボールを近付けた。
グレイシア『……』
赤い光がグレイシアを包みそのままボールへ入っていった。
ユウキ「急いでポケモンセンターへ行ってきます」
カーリー「おう」

僕は出口に向かって走った。途中でカーリーさんが僕を呼び止め、大きな声でこう言ってきた。

カーリー「来週の今日、同じ時間にここへまた来るわ。リベンジなら受けてたつで」

ユウキ「……はい！」

仲直り

～ポケモンセンター～

グレイシア『んっ……』
ユウキ「あっ、気付いた？」
グレイシア『ここは？』
ユウキ「ポケモンセンターだよ」
グレイシア『ポケモンセンター？』
僕は彼女が気絶してから今までの経緯を説明した。傷だらけでポケモンセンターまで間に合わないので勝手にゲットしたこと、再戦を約束したこと。危うくお尻の穴を開かされるとこだったこと。
グレイシア『お尻の穴？　どういうこと？』
ユウキ「うん、僕もよくわらない」
しばらく沈黙が続いた。

ユウキ「ごめんね」
グレイシア『どうして謝るの？』
ユウキ「その……、怒ってるかなって」
グレイシア『何が？　お尻のこと？』
ユウキ「いやそっちじゃなくて、君を捕まえたこと」
グレイシア『ああ……、別に気にしてないわ』
ユウキ「どうして？　ゲットされるの嫌がってたのに」
予想外の反応に僕は思わず聞いてしまった。
すると彼女は少し考えこんでからこう答えた。
グレイシア『あんなにおいしいアイスを食べたのは初めてなの。あなたと一緒にいればあのアイスを毎日食べられる……そうでしょ？　だったらあなたと一緒にいた方がいいかもって思っただけよ』
ユウキ「そっか……でも実はあれ、お店のなんだよね。あんまり勝手にあげると……」
グレイシア『あら、あなたが買い取ればいいだけの話じゃないの？』
ユウキ「ははは……なるほど」
出費がかさむなぁ～……。まあ僕もまんざらでもないんだけどね。
グレイシア『それで、これからどうするの？　再戦まではもう少し時間があるんで

しょ？』
ユウキ「うん。でも体はもう大丈夫なの？」
グレイシア『大丈夫よ。それに負けっぱなしは嫌だもの、早くリベンジしたいわ』
彼女の目からひしひしと闘志を感じた。負けず嫌いなんだろうな。
グレイシア『それと……私もこの前はごめんなさい』
ユウキ「どうして謝るの？」
同じ質問をしちゃった。
グレイシア『あなたの指示を聞かず勝手に行動したからよ。あんなバラバラの状態じゃあの変態サングラスには勝てないわ。今度こそ〝一緒に〟戦いましょう』
ユウキ「うん！　じゃあ早速バトルの作戦なんだけど」
グレイシア『待って』
ユウキ「えっ？」
作戦会議を始めようとしたら、グレイシアが食い気味にキャンセルしてきた。なんだろう。
グレイシア『まずゲットしたらはじめにすることがあるでしょ？』
ユウキ「はじめにすること……ポケモンとトレーナーのスキンシップとか!?」モフモフ

グレイシア『触らないで』
ユウキ「えぇ……（困惑）」
グレイシア『名前よ名前。ニックネームと言ったほうがいいかしら。それを私に付けてよ』
ユウキ「ニックネームかぁ。んーそうだなぁ～」
ユウキ「フロンはどうかな？　女の子っぽくていいと思うんだけど」
グレイシア『あなたらしいセンスのかけらも無い名前ね』
ユウキ「さっきからひどくない!?」
グレイシア『ふふっ、冗談よ。素敵な名前だわ』
ユウキ「ではあらためて……よろしく、フロン！」
フロン『ええ、よろしくね』